Bブロックの「歩」ベスト3です。

ふ？　ほ？　あるく　あゆむ。読み方自由の漢字お題でした。
あなたなら、どの作品を推しますか。
そして東工大生が1位に選んだのは・・・？

答えは作品のあとの講評にてどうぞ。

隆々と

風が奔り、青々と茂った木々がざわめく。一つ、鳶が鳴き、続いて羽音が響いた。ふと、鼻の頭にくすぐったさを覚え、僕は立ち止まる。眉間をすり抜けた汗が、鼻の頭まで垂れていた。それを首にかけたタオルで拭い、何の気なしに、腕時計に目を落とす。——驚いた。麓のバス停で降りてから、もう二時間以上も経過していた。

高校時代の親友から手紙が来たのは、丁度一ヶ月前のことだ。曰く、山奥で自給自足生活しているから遊びに来い、とのこと。確かに在学中にも『自然イズフリーダム！』などと叫んでいたが、どうやらそのフリーダムに本当に飛び込んでいたようだ。いかにもアイツらしい。

その手紙に、『バス停から一本道。徒歩百四十分。快適な交通アクセス！』とあったので、恐らくもうそろそろ着くだろう。僕は、再度額に浮き出てきた汗を拭い、わざと大きく一歩踏み出した。

暫く歩くと、少し道が開けた。集落が近いのだろうか、今までと違う、踏み固められた土の感触がある。

そろそろ、か。立ち止まり、背中のリュックから、ペットボトルを引っ張り出した。一気に飲み干して、大きく息をつく。そして、そのまま大きく伸びをした。葉擦れの音が耳をくすぐり、陽の光が顔に心地よい。草の香りが風に乗って、僕の髪を揺らし、流れていく。

アイツの気持ちがわかったような気がする。確かに、こういう生活もいいかもしれない。

——自然イズフリーダ

——ざわん

「むうわっ」

感慨に耽っていた僕を、突然風のうねりが襲った。思わず小さく声を上げ、その場に立ち竦む。うねりは一瞬だけで、すぐに森は穏やかさを取り戻した。

なんだ、今のは。つむじ風、とは明らかにかけ離れている。とりあえず、乱れた鼓動を落ち着かせようと、深呼吸しようとして——、

目が合った。

少し先の縁石に、ちょこんと腰掛けるお婆さん。身尻に刻まれた深い皺は、優しい笑みを湛えている。自然とこっちまで笑顔になり、小さくお辞儀。こんにちは、と言うと、何度も頷きながら、手招きをしてきた。

「どうしたの、こんな山奥に」

しわがれた声。しかし、どこか懐かしく暖かい。

「えっと、友人に呼ばれまして」

「ここまでどうやってきたの」

「麓まではバスで……あとは歩いてきました」

そう言うと、本当に嬉しそうな笑顔が返ってきた。

「そうかいそうかい。いいことだ。いいことだ。——ちょっと地面に『あるく』と書いてみてごらん」

僕は、近くにあった木の枝で『歩く』と書く。

『少し』『止まる』で『歩く』。おもしろいでしょ」

「そうですね……言われてみれば。『歩く』のにどうして『止まる』なんでしょう。不思議です」

「なんも不思議なことないじゃないの」

お婆さんは空を見上げ、気持ち良さそうに言う。

「あなたもやってたでしょ。こうやってお日さまの光を顔いっぱいに浴びて」

釣られるように、僕も見上げる。鳶が気持ち良さそうに空を泳いでいる。……そういえば、東京でゆっくり空を眺めることがあっただろうか。

「目を閉じて、木のささやきを聞きながら」

今日に限って、いくら歩いても嫌にならない理由。

「森の匂いにつつまれて」

それは、柔らかな音と、優しい香りのおかげだったのかもしれない。

「……ほら、歩いていると、少し止まりたくなるでしょ。だから、『少し止まる』で『歩く』。

ね、なんも不思議なことないじゃないの」

「はい……そうですね。……僕は最近、歩けてなかったような気がします」

時計ばかり気にして、目的地まで行くためだけの運動。歩く、というのはそういうことじゃないんだ。

お婆さんは、また何度も頷きながら、

「歩きたいときはいつでもおいで。ここなら、歩くことができるでしょ。……さてと、私もそろそろ歩きに向かうとするよ。——それじゃあね」

再度、風のうねり。思わず目を閉じた僕が次に見たのは、誰も座ってなどいない、一つの縁石だけだった。

友人宅へ着くと、豪勢な山の幸料理と情熱的なハグと少しワイルドになった笑顔が僕を出迎えてくれた。

「よく歩いたな、疲れなかったか？」

馬鹿にしたようなニヤニヤに、僕も満面の笑みで返す。

「歩いたからな。全然疲れなかったよ」

ポカン、とするアイツ。仕方ない、教えてやるか。

「いいか、ちょっと『あるく』と書いてみてくれ——」

少し止まって眺めた景色は、とても輝いていたぞ、と。

独白

皆様、今日は。私、「歩」と申します。

本日はこの場を借りて、つらつらと文句を言わせていただきます。

まず、我々は香車が嫌いです。素直に一歩一歩踏みしめるということを知らない。努力を知らない。目の前が空いていると思えば一気に飛んでいってそれでおしまい。堪え性のない現代の若者を象徴しているとでも言えましょう。

次に桂馬が嫌いです。あの不思議な動き方はなんでしょうか。ぴょこぴょこ飛んで安定性の欠片もない。故郷のおっかさんは、何も言わないけれど、きっと早く腰を落ち着けて欲しい、定職について欲しいと願っているはずです。

そして銀が嫌いです。何が「唯一斜め後ろに動ける！」でしょう。日本男児たる者、一度戦場に出れば前進あるのみです。きっと彼は根性も四五度くらいは捻じ曲がっているに違いありません。捻くれ者です。

もちろん金も嫌いです。我々が何手かけて、しかも何分の一の確率で金に成れるとお思いでしょうか。一方の金は初期配置で既に金として存在する。これは正に「能力」よりも「人脈や血筋」で人間の価値が決まるという象徴ではないでしょうか？能力主義の現代社会に、時代錯誤も甚だしい！

当然角行と飛車も嫌いです。堪え性がない上に臆病者ときた。すぐに敵陣に突っ込んでは次の手で一目散に退却、勝てる勝負しかしない。そんな安全策だけをとるようでは成長という物はありません。日々、挑戦すること。これを忘れた彼らに未来はないでしょう。

何が「角落ち」「飛車落ち」ですか。そんなに角行や飛車が大切なら、「歩落ち」で戦ってみればいいんです。あなたたちの大切にしている角行と飛車げますから、それで戦ってみてください。出来ますか？出来ないでしょう。大切さに気付くのが、いなくなってからでは遅いんですよ？

そうそう、取られた時に「あぁ、歩で良かったー」なんて呟くのは止めてください。まして取ったときに「歩なんて使えねーよー」なんて聞こえよがしに呟くのも止めてください。だったら取るな！我々は我々なりの精一杯を戦っているんです！

さて、本日の文句はこのあたりでお開きとさせていただきます。まだまだ語りたいところなのですが、次の対局も迫っておりますので、この辺で。

では、御静聴、有難うございました。

選択

恋人なんて呼べるような相手ではなかった。けれど、きっとそれ以上に信頼していたのだと思う。この3年間いつも一緒にいた。単に絆という言葉でくくることのできない間柄。そんな関係だった。

一緒にがんばり、一緒に泣き、そして、一緒に笑った。かけがえのない時が一秒単位で愛しくて、瞬間の一つ一つを写真にとって収めておきたかった。

そろそろ日の出が早くなってきたな。そんな言葉を後ろのその人に投げかけた。自転車で送るといった自分の意見を無理やり押し通した結果だった。その人は、もう行ってしまう。どこか遠くの都市だった。

全く勉強のできなかった自分とは違って、その人はどこか遠くの学校へ行ってしまうのだと聞いたときにはショックだった。けれど、心から祝福した。これからがんばれよ。そういったら、その人は顔を少し恥ずかしそうにして、しっかりとうなずいたっけ。一瞬どきりとした。

坂を上ると駅が見えてきた。もう少し、もう少しで、お別れだ。地元の工場に就職が決まっている自分は、簡単に会いに行くこともできないだろう。自分の分もがんばってくれよ。口には出さないけれど、伝わっているとわかった。

駅に着いた。どこかで悔しい思いがする。一生つかなかったらいいのに。永遠にあの人を自転車の後ろに乗せて、どこまでも走っていきたかった。きっと自分はあの人のことが好きだったのだ。でも、そのことを口にすることはためらわれた。そんな陳腐な言葉はきっと似合わなかっただろうから。それ以上の何者でもない関係で痛かったから。

きっと後悔するだろう。でも、後悔してもかまわないとおもった。あの人が思うような未来を作ってくれればそれでいい。自分が余計なことを言うべきじゃないんだ。

彼女はすでに切符を買っていた。田舎の駅から遠くの町への切符。いつの切符より少し大きな紙に印刷された、片道の切符。ああ、遠くに行ってしまうんだなという思いが実感となって現れた。

入場券を購入するのも初めてだった。ただ見送る人のために作られた切符。その一枚を握り締めるたびに、その人との距離が大きくなるような気がした。

自分も同じ電車に飛び乗ってついていってやろうかという思いは、想定だけに終わり、ただ、手を振って見送ることしかできなかった。その人のさよならという言葉をさえぎって、行ってらっしゃいといったのを自分は今でも覚えている。

「歩」本選Ｂブロック作品講評

１　散歩日和　5位　5ポイント

　友達だから、しっくりなじむ。一緒に歩く、ここちよさ。同じ方向を向いて、会話がとぎれても気にならなくて。
　そんな気分を３駅歩いちゃったよ、という行動の描写で、ふわっと伝えて、しあわせな読後感です。
　イチオシフレーズ：「何年後かにまた今日のことを笑って思い出す日が来るといいね」

２　歩き、走り、止まり、　9位　1ポイント

　三つの動きの長所と短所をぴっしり書き分けたところは説得的な展開だったのですが、ちょっと抽象的すぎたか。歩くって、走るって、作者さんはどんなことをイメージしてるの？というあたりを語っていただくと良かったのでは。

３　隆々と　1位　29ポイント

　ぎっしり二段組。さいしょ構えてしまったのですが、ざわんと登場するおばあさんに、まあ、そう急ぎなさんな、と言われているようで許せてしまい、木洩れ日気分に一緒に浸れました。
　ちょっと、くたびれ気分の教室に、ふわっと森の空気を運んでくれたような。首位、おめでとう！
　イチオシフレーズ：「ざわん」「バス停から一本道。徒歩百四十分。快適な交通アクセス！」「少し止まる」「フレーダむうわっ」
　ということで、今週のイチオシフレーズ大賞もゲットです。おめでとう。

４　兵士か歩か　8位　2ポイント

　力作が続いてたいへんでしたね。
　将棋を補助線にチェスを位置づけた解説が分かりやすく読めて、おもしろさを紹介しよう、といういっしょうけんめいさが伝わってきます。
　貴族的、だからインテリア。対比もくっきり印象的でした。

５　独白　1位　29ポイント

　うまいうまい。現代社会諷刺まで織り込んでの、「歩」さんトーク。ことに他のコマの行動様式をぐさぐさ斬るくだりが痛

快です。
　で、おもしろいばかりでなく、「我々なりの精一杯を戦っているんです」としっかり人生の重みも響かせたところが、まことにもってニクい演出でした。一箇所のみの脱字も、ご愛嬌で、こちらも首位、おめでとう！
　イチオシフレーズ：「根性も四五度くらいは捻じ曲がっているに違いありません」「飛車げます」「『歩』は使えねぇ」

6　彼方からの歩み　11位　0ポイント

　時は動かず。人のみが亀のごとくのろのろと動く。まさに人生そのものを切り取ってきたような。
　ちりちりと熱い、不毛の、それでも歩く、といかにも人生らしく、いくつもの要素を緻密に組み込んで、解説抜きでドラマとして見せたところが良さでした。

7　いつか歩けなくなる時　4位　7ポイント

　つらい経過を緻密にたどることで、訴えかけてくる迫力が備わって。いわば〈墓碑銘〉でしょうか。
　人生の終わりをどんな形で迎えるか。答えはもちろんすぐには出ないけれど、こうやって自分の経験の何かにケリを付けて先へ行く、それもまた文章を書くという営みの意味なのかなと、ぎっしり綴られた文字を辿りながら思ったりしました。

8　無題　11位　0ポイント

　一転、まぶしすぎるよ！　夕日。「墨鏡」が要りそうです。王道を照れずに突き進み、突き抜けた爽快さでした。
　ラスト３行の詩のダメ押し感が、なぜか笑いを誘います。

9　選択　3位　10ポイント

　遠いセピア色のあの日。淡い恋と別れ。ラストの「今でも覚えている」が、ふわっとレトロ感を醸し出して、「地元の工場で働く」など設定もていねいに作り込んであって、ドラマに浸り切れました。入場券のくだりでしんみり、そこへ決めセリフ「行ってらっしゃい」。ツボを押さえたストーリーテリング、おみごとです。

１０　小さな一歩　6位　3ポイント

　そして、またまた「墨鏡」の御用意を。８よりさらに強烈です。
　アームストロング船長もびっくりの王道プロポーズ。おめでとうアプローズ。月面にまで届く熱い愛をはぐくんでくださいませ。おしあわせに。

１１　synchronic　9位　1ポイント

　気合いの入りまくったド派手なプロポーズも一生一度の晴れ舞台でアリだけれど、こういうさりげないのも、いいなあ。
　言葉なんて要らない。寄り添って暮らしてゆくことで、ゆっくり傾いてゆく気持ち。さらりと掬い上げて余情ゆたかな仕上がりでした。
　おんなごころ、気づいてください、未来のハズバンドさんたち。

１２　あるなしクイズ　6位　3ポイント

　さいごは恒例（なのか？）クイズにて。
　手間かかってますよね。ドラマのワンカットごとに静止画気分でクイズを入れてゆく。
　アイディアはおもしろかったのだけれど、ドラマに浸りたい読者とクイズを解きたい読者の両方にサーヴィスしようとして、どっちつかずになってしまった感も。
　イチオシフレーズ：「目が、目が〜」